

この研究では、イタリアの画家フランチェスコ・マッツォーラ、通称パルミジャーノの絵画や素描作品群の様式的特徴をフォルムや技巧といった芸術の基本要素に解体し、年代や地域ごとに分析した上で、彼がローマ滞在中に習得したものが、どのような経緯で他地域に普及していったのかを解明することに努めた。つまり、16世紀初頭のローマ教皇庁で隆盛を極めた宮廷様式、即ちマニエリスムの様式的特徴が、イタリア全土、そしてアルプスの北側やイベリア半島に伝播していった経緯を、パルミジャーノという画家と彼の作品を通して、彼の人的交流の観点から明らかにすることを目的に遂行した。

パルミジャーノは、37年という短い生涯の中、1520年代から1530年代にかけてパルマ、ローマ、ボローニャ、そしてカサルマジョーレと各地を移転しながら、絵画、素描や版画などおよそ900点もの作品を残している。ローマ以前、ローマ時代、そしてローマ以後という分類で検証する場合の期間の長さや作品の分量がイタリアにおけるマニエリスム様式の隆盛と合致していることから、マニエリスム芸術の伝播の問題を例証するのに適切なケース・スタディであると考えた。

「パルミジャーノは、腕が上達している者なら誰でもが願うように、ローマに行きたいと思っていた。名匠たち、とりわけラファエロやミケランジェロの作品の素晴らしさも耳に入っていたので、彼は年老いた伯父たちにその思いを打ち明けた・・・」と、ヴァザーリも『芸術家列伝』で報告したように、パルミジャーノは自分の才能を当時の芸術の中心地であり、名匠たちが集まるローマで試してみたかった。彼が19歳の時であった。

この当時のローマは、1499年にドナート・ブラマンテがミラノから移住し、1505年にはミケランジェロが再び舞い戻り、1508年にはラファエロも移住してきたので、名実共に芸術の中心地として活性化していた。従って芸術を志す若者たちは、正に吸い寄せられるように、この地に集まってきたのである。パルミジャーノもその一人であった。出身地のパルマで基礎的な画業のトレーニングを受け、自分の腕前に自信が持てるようになったパルミジャーノは、ローマへと向かい、教皇庁の宮廷でポリドーロ・ダ・カラヴァッジオや、ペリーノ・デ

ル・ヴァガといったラファエロの弟子たちや、ロッソ・フィオレンティーノ、版画家のジョヴァンニ・ヤコポ・カラッリオやウゴ・ダ・カルピらと出会い、古代ローマの遺跡や、ルネサンスの巨匠たちの作品群に触れながら、自らの芸術を発展させた。

拙論においては、主としてパルミジャーノのローマ時代の素描作品群、例えば *Christ Healing the Sick* (Popham, 1971, plate 189) や、 *Minerva Playing on the Pipes* (Popham, 1971, cat. 391) などを検証し、人物像のドレープ描写に見られるリズムカルな曲線の流れ、速い筆の動きにも関わらず詳細に渡ったクオリティの高い装飾の描写、建築物を背景にした画面における絵画空間の構成の正確さと奥深さ、人体描写における解剖学的な要素といった様式的特徴を確認し、ローマ以前の彼の作品と比較しながら、それらの様式的特徴がローマの、それもラファエロ工房に由来するフォルムやスキルであることを指摘した。

次に Bernard Degenhart が 1937 年に発表した論文 *Zur Graphologie der Handzeichnung* のイタリア素描の地域別分類法を振り返りながら、特定の様式的特徴を特定の地域に帰属させることの曖昧さや限界について議論した。つまり、芸術における様式的特徴は、芸術家や作品そのものに帰属するものであり、人と物の繋がりネットワークを辿ってこそ、その様式的特徴の伝播が説明できることを論じた。その際は、George Kubler の *The Shape of Time* の理論を用いて、Kubler が唱える Prime Object と Sequence の概念で以って、パルミジャーノのケース、つまりマニエリスム芸術の伝播のケース・スタディを検証した。Prime Object とは数学の素数のようなもので、芸術作品においてこれ以上は分割できないという要素である。Sequence は数列のようなもので、終わることなく続く連鎖である。パルミジャーノを介して伝播したローマ教皇庁の宮廷芸術の場合、Prime Object は、彼の様式的特徴を指し、Sequence は彼の人的繋がりネットワークを指す。拙論ではこの Kubler の理論をパルミジャーノのケースに当て嵌めながら、マニエリスム芸術の伝播について詳説することに努めた。